

Japanese man in NY (ニューヨーク生活)



(Photo: 72nd Street and Central Park West)

《ぶらりマンハッタン救急車の旅 Part-2》

(前号からの続き…)

セント・ヴィンセント病院に到着すると、のんびりと穏やかな日差しが見慣れた風景の77thアヴェニューを照らしていた。通りの直ぐ先にはヴィレッジ・ヴァンガードがある…。

そのまま院内の一室に運ばれたが、左右にベッドが4つ向かい合う形で置かれていて、何だかとても騒がしかった。というのも、この部屋は救急患者が一時的に収容される病室のようで、自分もその部屋のベッドをあてがわれ、暫くの間は一人放って置かれた。ベッドを囲むカーテンが全開だった為、まわりの様子が丸見えだったが、冷静になって見れば見るほどもの凄いな状況だった。

まず、向かって左端のベッドに寝かされた白人の太った男性患者。上半身裸で体中に管のようなものがはり付けられているが、暫くすると心配停止状態に陥ったのだろうか。白衣を着た数人の医師や看護婦に囲まれ電気ショックを与えられているようで、「ビビッ」と嫌な音が鳴り響く度にその患者の巨体を打って下する。しかし、意識が戻る様子が見られない…。何度か電気ショックを与えているうちに、一命を取り留めたのだろうか。看護婦や医師の怒号や掛け声と共に、ベッドごと何処かへ運び出されてしまった…。

その隣(向かって左から2番目の)のベッドは空いたが、暫くすると頭から上半身にかけて血だらけの白人の男性が運ばれてきた。喧嘩でもしたのだろうか、酷く興奮しているようで、医師や看護婦に押さえつけられながら辺りかまわず怒鳴り散らしている。そうこうする内に、自分の真向いのベッドにもたれていた白人のおじいさんがいきなり嘔吐…。その瞬間をモロに見てしまったから堪らない。

そして、血だらけの男を抑えていた看護婦が、そのおじいさんの元に向かった瞬間に、血だらけの男が医師や看護婦たちの手を振り払ってベッドから降り、叫び声を上げながら病室から出ようと試みながら再び押さえつけられる。おまけに嘔吐したおじいちゃんの衣服はゲロまみれ。危くもらいゲロをすところ、視線を反して耐える自分。

向かって一番右端のベッドはカーテンで覆われていたが、白人のおばあちゃんであろう。しきりに「I want to go home!」と叫び続けている。また、どのベッドに居たのだろうか。一見してジャンキーだとわかるようなガリガリに痩せこけた男が、プツツと独りごとを言いながら真ん中の通路を徘徊…。「危ねえなあ」なんて思いつつもベッドの上でいつとも逃げられる半身の体勢で身構えながら、そのおぞましい病室内の光景をただ見つめる自分。

そんな状態で30分ほど経っていたが、漸く自分のベッドの周りのカーテンが閉められ、続いて白衣を着た若いアジア系の2人の男が入って来た。愛想だけはいいが、どう見てもインターンだと分かるような顔にあとけな気が残る2人だった。笑顔で「気分はどうだい?」なんて聞くもんだから「I'm fine」と笑顔で返し仰向けになった。

カーテン越しには先ほどから続くおばあちゃんの「I want to go home!」という叫び声や無数の足音、話し声、ガチャガチャと喧しい医療器具の音が鳴り響く。「あのジャンキーは大丈夫か?」なんて気になりながらも、どうにか心を落ち着けて天井を見上げた。

すると、その若いアジア系の2人の男が、自分のベッド脇で医療器具をガチャガチャと準備し始める。「まさか、こいつらが何かするわけではないよな…?」2人が準備を終えたら先生が来て、ちゃんとした処置してくれるんだよなあ…。」なんて一人納得していると、洗滌器かと思えるほど太った注射器状のものが視界に入った。そして、何やらプツツと話す2人。そのうち片方の男が、左脇下と脇腹の中間あたりを消毒液で吹き始めた。「痛いけどちょっと我慢して」なんて思っても寄らぬ一言を発するが、「麻酔か」と納得しながら「OK!」なんてクールに返す自分。しかし、そんな状況も束の間、物凄い圧力が左脇から襲う。思わず「うっ!」「おおっ!」という呻き声を漏らさずにいられない。「やめろ!」なんて言う事もできず痛みを通り越した恐怖感と圧力に踏ん張って耐えていると、左脇から血が吹き出るのが見えた。

なおも、「うっ!」「おおっ」と涙目になりながら痛みを耐えているとパイプ状のものを左脇に刺すのが見え、更にそのパイプに管を入れていくような気配。どう考えても麻酔じゃないことは確かだが、痛みと恐怖と男気でただただ耐えるのみ。ワールド・トレードセンターの病院で撮ったレントゲン写真であらう。一方の男がそれをさざし見ながら、もう一方の男に話しかける。そうこうしているうちに体の左側に何か細い異物が挿入されている感覚が襲った。体の左側には心臓があるんだという感覚があり、その異物が徐々に心臓部に近づくと感じる。体内の何処かにそれが軽く触れる度に、恐怖と痛みとくすぐったいような変な感覚が襲うが、「下手に動いたら心臓が危ない…」なんていう恐怖感でじっと耐える他なかった。どうやらレントゲン写真を見比べながら、肺の付近に管を挿入しているようだったが、「分量で入れてんのか?!」なんて言い返すことも出来ずただひたすら耐えるのみ。

やがて左脇から出た管の先に、床に置かれた縦長の水槽のようなポンプが装着され、慌しさや恐怖感に苛まれる中、若いアジア系の2人の男はカーテンの外に消えて行った。左脇に穴を開けられたのだから、当然のように動くだけで痛みが走る。また、麻酔なしで体に穴を開けたショックも大きく、ベッドの上で起こった状況を頭の中で整理するのが精一杯だった。

いつの間にかカーテン越しに聞こえていたおばあちゃんの「I want to go home!」という声は消えていた。その後、約一週間の入院を余儀なくされたが、入院中に管が外れるハプニング。どうしてもベッドの上でトイレができず、数メートルの延長コードを装着してもらい、ポンプを持ち運びながらの用足しなど、様々な思い出がある人生初の救急車搬送 & 入院生活体験。

自分の緊急入院の知らせを受けて直ぐに駆けつけてきてくれたKレストランでお世話になったおしょうさんとユージさん。そして、お見舞いに来て頂いた友人・知人の方々には本当に感謝しています。おかげさまで、僕の肺は今も活発に動いています。